自閉症に対する関係発達支援
ー関係発達臨床からのアプローチー

小 林 隆 児*

はじめに

これまで人間発達やその障害は「個体(個人)」を中心にして考えられ,「(養育)環境」はあくまで副次的なものとして取り扱われてきた．しかし，昨今,「個体」の究極的な次元ともいえる遺伝子研究が進むにつれ，皮肉なことに「環境」の重要性がより一層浮かび上がりつつある．さらには，2001年WHOで決定された国際生活機能分類(ICF)では，障害は個人と環境の相互作用の結果の産物として，明確に位置づけられるようになった．今日,「個体(素質)」と「環境」がどのように相互に影響を及ぼし合いながら発達(障害)がもたらされるのか，その実態を明らかにするための新たなパラダイムが求められている．

これまで自閉症の治療は，子どもにみられるなんらかの発達上の遅れや歪みなどの障害を評価し，その結果をもとにいかにしてその障害を軽減していくか，あるいは環境を調整していくか，という観点から考えられてきた．自閉症にかぎらず発達障害といわれる子どもたちに認められる臨床像を個体という閉じられた中で生まれたものではなく，彼らと直接的に関わるわれわれ(養育者，療育者，教師，保育士など)との関係の中で捉えることを通して，われわれは彼らへの治療あるいは支援のあり方を模索している．われわれがこれまで10年あまりにわたって実践を蓄積してきた関係発達臨床の立場から，自閉症に対する支援について論じてみよう．

まず取り上げなければならないことは,「関係」という枠組みで自閉症理解を試みるにあたって，従来とは異なった概念操作が必要になるということである．その手始めに，われわれの依って立つ「関係発達臨床」において，どのような考え方が重要となるかを説明する．

関係発達臨床における基本となる考えについて

1. 発達論的視点からみたコミュニケーション構造ー情動的コミュニケーション

第1に，自閉症にみられる対人関係障害，すなわちコミュニケーションの問題を発達論的視点から捉えると，言語などの象徴機能をもつ媒体を介したコミュニケーション(われわれのいう象徴的コミュニケーション)の成立以前のコミュニケーション段階，つまりは話しことばや身振りによるコミュニケーションが生まれる前の段階でのコミュニケーションに焦点を当てることが必要であるということだ(図1)．これまでわれわれが情動的コミュニケーションと称し

*東海大学健康科学部社会福祉学科

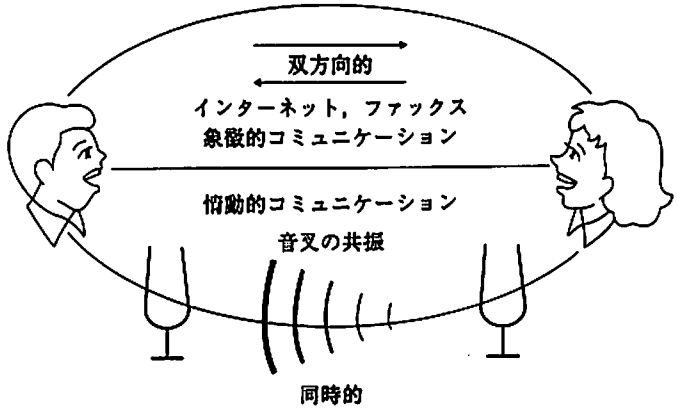

図1　コミュニケーションの二重構造[2)]

てきた問題であるが，この段階でのコミュニケーションを検討することは非常に困難な課題であった．その最大の理由は，このコミュニケーション過程においては意識が介在していないこと，すなわち当事者自身がこのコミュニケーション過程を，実感をもって捉えることができないことにある．意識が介在しないコミュニケーションであるという性質上，これを直接目に見える形で採り上げて論じることが容易ではない．そこでわれわれは，実際の臨床の場で一刻一刻変化する過程をビデオカメラで録画し，後にセッションを振り返る際に，ビデオフィードバックを行っている．このことによってコミュニケーションの様相を具体的にリアルな形でもって捉えることが初めて可能になった．われわれの臨床研究の場である Mother-Infant Unit[2)]に備えられているビデオ録画装置を駆使することにより，実際のコミュニケーションの場で何か起こっているのか，それまで気づかなかったこと，あるいは気づきにくかったことに，いろいろと気づかされたのである．話しことばを用いたコミュニケーションが困難な段階において，自閉症の子どもたちとわれわれとのコミュニケーションはどのような次元で展開しているのか，そのことを明らかにするには，

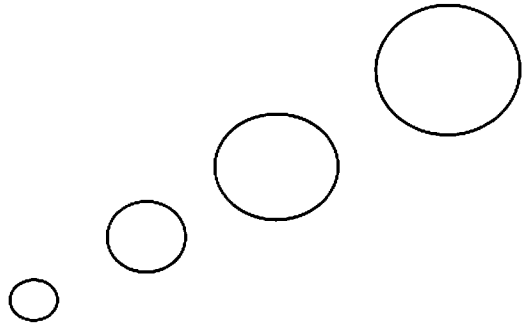

図2　原初的知覚の特徴（その2）[2)]

情動的コミュニケーションの実態を充分に理解することが求められているのである．

2. 五感を超えて通底する未分化な知覚様態－原初的知覚様態

第2に，最近の自閉症者自身による手記を通して再び重視されてきた知覚の問題がある．従来知覚はほとんど五感を中心に論じられてきたが，発達論的視点からみると，われわれの視聴覚のような高度に分化した知覚ではなく，未分化な知覚そのものに焦点を当てることの重要さが浮かび上がってくる．五感に分化する以前の段階での原初的な知覚様態である．たとえば，図2をみていると，丸い図形がいくつか斜めに連なっているという捉え方の他に，下方向へあるいは上方向への動きを感じることができる．

図3　原初的知覚の特徴（その1）[2]

さらには図3の大小の活字「林」をみていると，「はやし」という字であると認識するとともに，大きい活字がこちらに接近してくるように感じ，小さい活字は遠くへ離れていくような動きを感じることに気づく．さらには大きい活字には力強さを，小さな活字には弱々しさを感じとることもできる．力強いとか弱々しいと表現するのは，それらがなにか生きているように感じ取られているからに他ならない．これまでわれわれが指摘してきた力動感(バイタリティ・アフェクト)とか相貌的知覚といわれるものである[1]．それはあらゆる刺激を，五感を超えて感じ取る知覚のあり方を意味し，具体的には刺激のもつ動きの変化を鋭敏に知覚し，かつそれを生々しく生き物のように感じ取るという特徴をもっている．

なぜこのような未分化な知覚様態を取り上げる必要があるかといえば，先に述べた情動的コミュニケーションの世界とはまさにこのような未分化で原初的な知覚様態に依拠した世界であるからである．

3. 未分節な〈知覚ー情動ー運動〉過程

原初的な知覚様態の特徴は，このような力動感や相貌的知覚として現れるが，さらに忘れてならないのは，このような原初的な段階においては，心の働きもわれわれのそれのようには分節化されて(分化して)いないということである．具体的にいえば，運動過程，知覚過程，情動過程などが未分節な形でもって一体となって同時的に機能しているということである．通常われわれは知覚の働きはそれ自体として独立して機能していると考えがちであるが，実際には情動のありようによって知覚のあり方そのものも変化している．原初的知覚様態にあっては，まるで知覚過程そのものが独立して機能しているかのように扱うこと自体，発達論的視点に欠けた見方といわざるをえない．

ここで述べた運動過程，知覚過程，情動過程おのおのが一体となった原初的形態にあるということは，〈運動ー知覚ー情動〉過程として未分節な形でもって捉えなければならないということを示している．このことを理解することはさほど容易なことではない．なぜならわれわれの認識世界は通常，このように様々な心的過程を切り分けて考えることを当然のこととして受け止めているからである．

そこで理解を促すために，分かりやすい例を取り上げてみよう．筆者が嘱託医として関与している自閉症入所施設においてよく経験する例であるが，状態が悪化すると食事をしなくなり，食事を促すとすぐに嘔吐する自閉症青年がいる．最初は本当に体調が悪くて嘔吐を繰り返していたのであるが，その時担当職員から甲斐甲斐しく世話をしてもらったことが大変心地よかったのであろう．その後，何かにつけて(われわれには)わざとらしく(みえる)嘔吐をするようになった．従来の精神医学ではヒステリーの疾病利得とでも説明できそうな現象であるが，彼にとっては職員に世話を焼いてもらいたい，つまりは甘えたいという関係欲求がこのような行動でもって表現されていると見なすことができる．なぜ彼がこのような嘔吐でもって自分の気持ちを表現しようとしたのかといえば，最初に嘔吐をした際の心地よさの再現の欲求が嘔吐という行動を引き起こしているのである．その時の彼にとってはそこでの世話をしてもらったという体験，嘔吐という反応行動，心地よかったという情動体験などが渾然一体となって記憶されていたのであろう．嘔吐した際の心地よかった体験の再現を期待してなんらかの甘

える行動をとってもよさそうであるが，彼にとっては心地よかった悄動体験と嘔吐した際の世話をしてもらった体験が不可分に一体となって記憶され，その再現が必然的に嘔吐の行動を引き起こしたと考えられる．われわれであれば，体調が悪かったから嘔吐をしたのだ，世話をしてもらったから心地よかったのだ，などとその体験の一部を切り取って理解しがちであるが，原初的コミュニケーションでの体験様式は彼のような渾然一体となった体験として記憶され想起されるのである．嘔吐するという行動は心地よかったという体験の象徴的な意味合いをもったものということができる．

他のある青年期の男性自閉症者は，入所当初から非常に激しいこだわり行動を示し，それが阻害されようとすると衝動的な攻撃的行動を起こすため，職員は彼の対処に大変苦慮していた．そんな彼がある日の夜のコンサートで配られるおやつを職員から直接手渡されるとどうしてもそれを受け取ることができなかったが，そのおやつがたまたま床に落ちていると，それをさほどの抵抗もなく取って食べることができた．彼のこだわり行動をよく観察してみると，たとえば身の回りの様々な事物の位置が気になって仕方がないのであるが，気になるのは単に事物の位置ではなく，その事物に誰がどのように関わったか，そうした状況全体を再現しようとしていることが特徴的であった．よって，彼は部屋のドアが開いていたり，物の位置が変化していると，彼にとっては，それらが単に元の状態に回復すればよいということではなく，それを誰が扱ったかという状況全体が不可分に関係しているために，扱った人を引き寄せて元に戻すように要求するのであった．

このようなエピソードは，彼らが対象を捉える際に，常にその背後に某かの他者の存在(相貌性)を感じ取っていることを強く推測させるとともに，彼ら(自閉症者)はわれわれのように事物などの対象のみを切り分けて捉える(認知する)のではなく，状況全体を未分化な形でもって捉えるという世界把握の特徴をもっているということである．

このような世界把握のあり方は Werner[6]の指摘する原初的知覚様態の特徴そのものを示している．発達論的観点に立脚した理解の重要性を教えられる．

このような例を引き合いに出すと，すぐに連想されるのは，従来自閉症に特徴的とされてきた遅延性反響言語という独特なことばの使い方である．ここにも先と同様の知覚体験様式が認められよう．遅延性反響言語は過去のある印象的な場面(文脈)そのものの想起(再現)をその際の印象的なことばでもって象徴的に示しているが，ここで示した嘔吐という行動でもって自分の甘えたい気持ちを表現したのも，同じようなプロセスから生まれたものということができよう．ここに原初的知覚様態とその体験様式の特徴を見て取ることができるのである．

4. 未分節な心的過程から分節化した心的過程へ

このような未分節な心的過程の働きは，われわれの中に取り込まれてきた多くの概念へのとらわれから自由になることの必要性を示している．たとえば，「自己－他者」というように，初めから「自己」と「他者」がおのおの分節化した形で彼らに現れてくるかといえばそうではなく，原初的な心的過程にあっては，〈自－他〉未分節な状態にあるというところから出発しなければならないことを意味している．その後の成長過程で高次精神機能である言語認知機能などの人間の多様な心的機能へと分節化(分化)の過程をたどっていくのである．その過程では知覚の分化を初めとする様々な身体機能の分化が起こり，心的機能の高度化を支えていくことになる．この原初的知覚様態と発達経過との関係を示したのが図4であるが，われわれが自閉症

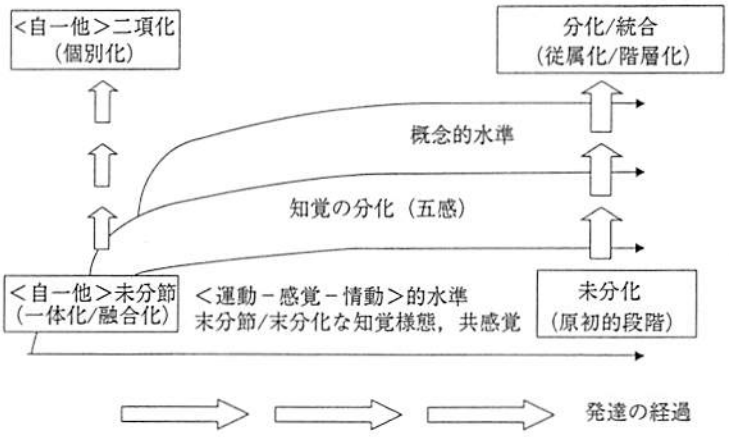

図4　原初的知覚様態と発達経過

の人々と関わり合う際に，この原初的知覚様態を基盤とした関係，すなわち原初的コミュニケーションの世界がどのようなものかをよく理解していくことが求められるのである．

自閉症の三大行動特徴をどのように理解するか

1. 対人関係障害

自閉症の子どもの対人的構えが「自閉的」であるという印象は，今でも多くの人々が抱いているものである．言語認知障害仮説に傾倒していた人々は，言語認知障害をもつゆえに，自閉的行動を呈するのだと考え，それを二次的産物であると見なしてきた．そのような立場の人々は，自分との関係(彼らに自分がどのように関わっているか，あるいは自分たちの存在自体が彼らにどのような影響を及ぼしているか)を棚上げにし，彼らのみを対象化し，観察・評価のもとに論じてきたといわざるをえない．たしかに自閉的という特徴のみを捉えて，彼らに対して「心を開く」ことを目標に据えて働きかける時代は遠い過去のものとなっていようが，従来いわれてきた「自閉的」な対人関係がなぜ彼らの(一見すると)独特な言語認知発達像や臨床像を形成していくのか，その成り立ちを究明していくことこそが今われわれに課せられたテーマである[4]．

関係発達臨床の根幹をなすのは，自分の存在抜きに子どもの対人関係の問題を論じることは不可能であるという視点にある．人間は常に外界に開かれた存在であり，かつ常に外界からの不断の刺激にさらされながら，自分も刺激を発する存在として，相互に影響を及ぼし合いながら，生の営みを展開している．このような視点から捉えなおした時に最初にみえてくるものは，他者の存在に対する異常とも思えるほどの〈知覚－情動〉過敏と(おそらくはそれに基づくと思われる)対人回避傾向を有するという彼ら独特の対人的態度である．それとともに重要なことは，その背後(内面)に強い関係欲求(甘え)が潜んでいることである．他者(主に養育者)と関わり合いたいという思いと同時にそのことによって自分が傷つく恐れを抱いて回避的になってしまう．このような心的状態はアンビバレンス(両価性)といわれるものである(**図5**)．このようなアンビバレンスの強い状態が持続することによって，彼らは常に強い心的葛藤状態(ジレンマ)におかれることになるが，その結果彼らは様々な行動で反応を示すようになる．動因的葛藤行動(**表1**)といわれるものであ

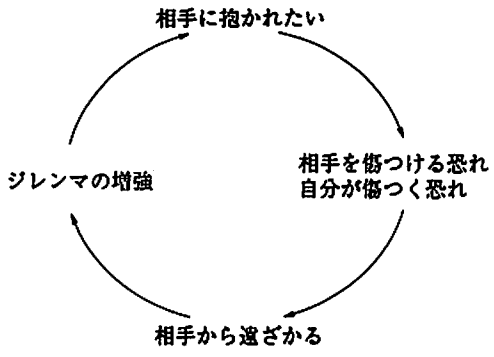

図5　自閉症児にみられるアンビバレンス[4)]

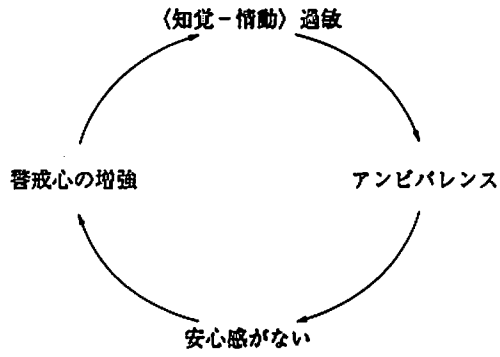

図6　〈知的－情動〉過敏とアンビバレンスによる悪循環[4)]

表1　動因的葛藤行動

→探索　Exploration
→過剰に強い反応(かんしゃく)　Overintensity
→注意をそらす　Switch attention
—課題から　from task
—人から　from person
→置き換え行動　Displacement activities
→自分への攻撃(自傷)　(Re-directed)aggression
→退行　Regression
→愛着　Attachment

る[5)]．自閉症にみられる特異的な行動の多くはこれに含まれると考えてよいであろう[3)]．このように，彼らの対人関係障害の基盤に，心理的に強いアンビバレンスとそれに伴う強い葛藤が働いているということなのである．

さきほど彼らには生来的に独特な〈知覚－情動〉過敏が認められると述べたが，実はこの〈知覚－情動〉過敏が単に生来的なものと言い切ってよいかどうかは大いに疑問のあるところでもある．というのも，彼らが対人関係の中で常にこのような強いアンビバレンスの状態におかれることによって，いつまでも養育者との間で〈甘える－甘えられる〉関係(愛着関係)が成立しがたくなる．そのため彼らには安心感が育まれない．安心感が生まれず，常に周囲に対して強い警戒心を抱いている状態にあるため，刺激に対してより一層過敏になっていく．ここにアンビバレンス→愛着障害→安心感のなさ→警戒心の増強→〈知覚－情動〉過敏の増強→・・・というように悪循環(図6)が生じてしまうのである．つまり，彼らの〈知覚－情動〉過敏を単純に素質の問題だと固定的に捉えることはできないということである．この悪循環を早い段階で断ち切ることができるならば，この〈知覚－情動〉過敏も改善することが期待できるからである．〈知覚－情動〉過敏についても関係の問題として捉える視点が重要だということなのだ．

このように自閉症児には強いアンビバレンスが認められるが，このことだけを取り上げて子どもの病理性の問題だと決めつけることには慎重でなくてはならないであろう．というのもそもそも人間の心には他者と繋がり合いたいという気持ち(関係欲求)とともに，自分らしくありたい気持ち(自己実現欲求)という互いに相反する気持ちを併せもっている．他者と繋がり合うことでもって安心感を得るが，それが高じると自分を失いそうになる不安が生まれ，他者から離れて自分らしさを保とうとする．このような両義的心性をもつのが本来の人間の心の特徴であることを考えると，自閉症児にみられるアンビバレンスのみを単純に病理的なものと見なすことには慎重でなくてはならないであろう．こ

こで最も重要なことは，われわれの両義的な心が時と場合によって適度に揺れ動くことによって自分の心のバランスを取っているのであろうが，自閉症児の場合には，生誕直後からアンビバレンスが強いために，養育者との間でいつまでも安心感を生み出す〈甘える－甘えられる〉関係が育まれないところに最大の問題があるといえるのである．

2. 言語的，あるいは非言語的コミュニケーション障害

従来コミュニケーション障害という用語は，子どもがコミュニケーションを営む際にその媒体となる話しことばや身振りを身につけていないために，コミュニケーションをうまく営むことができないという子ども自身の能力障害という意味合いで用いられてきたように思う．

ここで指しているコミュニケーションは，われわれがこれまで象徴的コミュニケーションと称していたものであるが，先に述べたようにコミュニケーションの最初の(原初的)形態としてのコミュニケーション，すなわち原初的コミュニケーション(情動的コミュニケーション)の内実を把握していくことによって，初めて自閉症の子どもたちとわれわれとのコミュニケーションの問題に肉薄していくことができると思われる．

情動的コミュニケーションの世界は，われわれ日本人には了解しやすい「甘え」の世界そのものといってよいが，自閉症にみられるコミュニケーションの問題は，この甘えの問題，すなわち関係欲求に対する強いアンビバレンスゆえに，情動的コミュニケーションが養育者と子どもとの間で成立困難な状態になっていると考えられる．子どもの関係欲求が適切な介入や援助によって顕在化し，それを養育者が受け止められるようになっていくと，多くの場合，急速に関係は深まっていく．ただ，多くの事例に対する介入の経験から痛感することは，子どもたちがこうした関係欲求を出すことに非常に用心深いということである．相手に接近しても相手の反応によって容易に傷つきやすいという過敏さはわれわれの想像を超えるものがあるかもしれない．

このように子どもの側に計り知れない過敏さが大なり小なり大きく関係していることは確かであるが，われわれが関係支援を考える上で，もっとも考慮しなければならないのが，養育者(われわれ)の側に子どもの関係欲求を受け止めることを困難にしている要因が大きく関係している場合である．そこで捉えられるコミュニケーションの問題は，子どもが強く依存している情動水準(原初的知覚の世界)と養育者の主なコミュニケーション手段となっている象徴水準(話しことばを用いる)との間の乖離(かいり)が大きく関係している．自閉症の人々とわれわれとのコミュニケーションの問題を，このような関係性の問題として捉え直すことによって，行動障害やことばの成り立ちを理解することが可能になっていく[4]．

このことを図示してみると，図7，8のようになる．図7では縦軸に社会性の発達を示し，下の特定二者関係から次第に上の不特定多数との関係へと推移していくとみなすと，前者では情動水準に強く依存したコミュニケーション形態になり，そこではことばの意味は文脈依存的になることを示している．それに比べて後者では象徴水準に強く依存したコミュニケーション形態に移行し，ことばの意味は普遍性を帯びることになる．

図8は同じく社会性の発達と知覚様態の関連性を示している．前者の情動的コミュニケーションにおいては，未分化な知覚(原初的知覚様態)に強く依存し，後者の象徴的コミュニケーションにおいては，分化した知覚すなわち，われわれのように高度に機能分化した視聴覚が主に働いていることを示している．

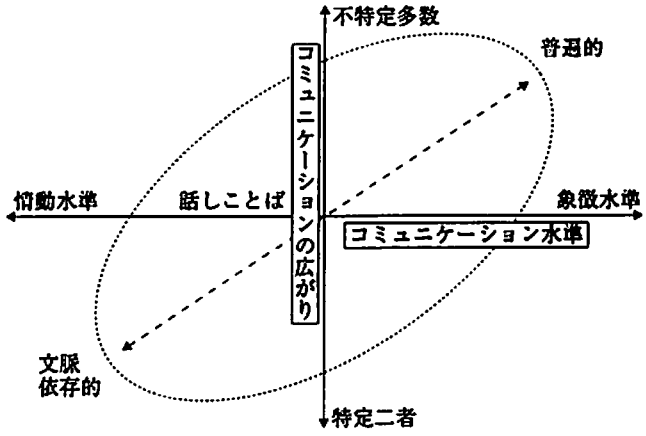

図7　社会性の広がりとコミュニケーション水準[4)]

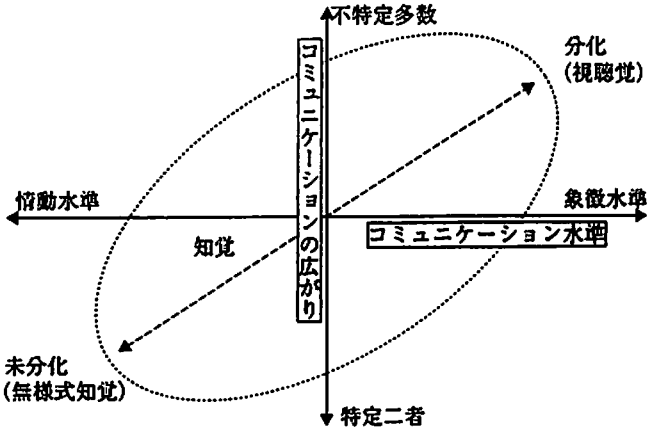

図8　知覚様態とコミュニケーション水準[4)]

図7，8から分かるように，自閉症児においては左下でのコミュニケーションに，われわれは右上でのコミュニケーションに傾きやすい．このことが両者のコミュニケーションを困難にしている大きな要因のひとつと考えられるのである．

3. 強迫的こだわり，同一性保持，常同反復的行動

先に論じた原初的知覚様態は，人間が本来有している動物としての本能的行動を支配している重要な特性である．ヒトが社会的動物である人間になっていく過程の最早期の発達段階で躓いている存在，それが自閉症の子どもであるということができるであろう．

関係欲求をめぐる強いアンビバレンスの心的状態にある自閉症の人々は，周囲他者に対して誰とも安心感を抱くことが困難であるため，常に強い警戒心を抱いている．安心感がなく，警戒心の強い心的状態にあると，人間は些細な刺激や変化によって異常なほどの不安(恐怖)反応を示す．そこで不安がさらに増強し，刺激に対する過敏さはいよいよ先鋭化していく．このような悪循環が生じやすいため，彼らは極力不安に晒されないために，なんらかの戦略を立てな

ければならない．そのための彼らなりの営みが，極力馴染みのある世界，すなわち変化の少ない，いつも同じような環境に身を置くことなのだ．その具体的な表現型が，同一性保持，常同反復的，あるいは強迫的こだわりと称されてきた行動である．このようにみていくと，彼らのこだわり行動を修正したり，制止したりする関わりが彼らにとってどのようなことを意味するか，およそ想像することができるであろう．自己の安定化のための唯一の試みさえ奪うことになりかねないほどの深刻な意味をもっているということである．

関係発達支援の基本について

1. 関係欲求をめぐるアンビバレンスに基づく悪循環を断ち切ること

自閉症の子どもと養育者の間で〈甘える－甘えられる〉関係の形成が困難な要因は，子どもが有する強いアンビバレンスにあるのは先に述べた通りである．このアンビバレンスのために，両者の間に関係の悪循環が生じる．われわれは，ここに生じる関係の難しさを関係障害として捉え，いかにしてアンビバレンスを和らげていくか，その介入(支援)が初期段階の最重要課題であると考えている．

先に述べたように，このアンビバレンスは刺激に対する過敏さをさらに増強していくという悪循環をもたらすために，もともとは子どもの生来的な〈知覚－情動〉過敏にあったとしても，われわれの存在自体もこの悪循環を増幅させる要因となっていく危険性が強いことを常に念頭におくことが求められる．どのような刺激が彼らにとって不快な刺激となるのかを理解することは，ここでの介入の最大のポイントといってもよい．それはあらゆる刺激を知覚する際の，原初的知覚の特性を知ることにある．たとえば，われわれが彼らと語り合おうとして相対して位置することが，彼らに非常に圧迫感を与える．さらには，われわれの語りかけることばの字面の意味ではなく，話しことばのもつ声の調子(抑揚，リズム，強弱，大小など)に非常に敏感に反応する．われわれが意図することばの意味にではなく，ことばに込められた情動に敏感に反応しているのであろう．ここで臨床上重要なことは，先に述べたようにこの情動というものは当事者に意識化することが困難であるということである．したがって当事者にそのことを気づいてもらうためには，無意識，あるいは前意識の領域をも視野に入れた介入が必要になる．

2. 関係欲求を引き出し，受け止めること

初期の介入が功を奏すると，潜在化していた子どもの関係欲求が表面化しやすくなっていく．しかし，彼らはわれわれの一挙手一投足に異常なほどの過敏な反応をしている．とりわけわれわれの心の動き(たとえば，養育者が他の誰かと話をして，子どもへの関心が他のことに移ることなど)に対して，高感度のアンテナを張り巡らせてキャッチしている．それは敵にいつ襲われるかわからない世界で生き延びるために，微細な刺激にも即座に反応する野生の動物を想像させるほどである．そのため，われわれの不用意な接近は，やっと表面化してきた彼らの関係欲求の芽を再び摘み取ることにつながりかねない．暖かい眼差し，包み込むような語りかけ，穏やかな雰囲気と心地よいリズミカルな動きなど，自然のもつ穏やかさにも共通するような刺激となる関わりが大切になる．そのような接近は自閉症の子どもに安心感をもたらす．

彼らと関わり合うことが非常に困難であることの最大の要因は，彼ら自身が自分の気持ちを容易に表現できないことにあるといってよいかもしれないが，それはけっして表現手段(話しことばや身振り)を身につけていないというような個体側の能力の問題として捉えることはできない．われわれに対して自分の気持ちを少し

でも前向きに出すようになると，彼らの気持ちははるかに捉えやすくなっていく．気持ちを前向きに出すということは，われわれに対して甘えたい，関わり合いたいという気持ちが高まっていることを意味する．そこで，われわれはじっくりと構え，彼らの用心深さを弱めながら，少しずつ彼らがわれわれに近づいてくれることを待つ，そんな姿勢が求められている．そのためには養育者である母親をいかにして支えていくかが大切になるが，それを阻む要因は今日あまりにも多い．自閉症と養育者のあいだのコミュニケーションの問題を親子二者関係に矮小化せず，様々な立場から支援を模索する必要がある．

3. 彼らの好奇心を育むこと

彼らの安心感が育まれていくと，外界に対して驚くほど強い好奇心を示し始める．安心感がないために些細な変化にも容易に不安が引き起こされていた状態(図9)は劇的に変わり，対照的に外界の些細な変化が彼らの好奇心を駆り立てるようになる(図10)．そのような外界に対する好奇心を育むための基盤となるのが，養育者との間に生まれる安心感である．養育者に対する関係欲求を引き出していくことが彼らへの援助の要となるのは，愛着に基づく安心感が外界への好奇心を育むための不可欠な要因だからである．

ただ，これまでの臨床経験から痛感するのは，彼らの好奇心は高まるにしても，それまでに染みついた用心深さ，警戒心は容易には消退していかない．長期戦を覚悟で取り組む必要がある．ここでの根気強い働きかけの成否は，のちのちの発達に大きな影響を及ぼすことになるのである．

4. 子どもの対象への関心の持ち方を分かち合うこと

好奇心が高まってくると，いまだ対象を認知するという枠組み(分節化)をもたない子どもたちは，対象をどのように捉えるようになるのであろうか．われわれは周囲にある対象をなんらかの意味あるものとして捉えることで環境を秩序化し，そこでそれなりの安定した世界を構築している．しかし，ことば(認知機能)をもたない子どもたちはそのような認識の枠組みで世界を秩序化することはできない．われわれにとってはごく些細な変化にしか見えないようなものであっても，彼らの世界ではそうではないのである．

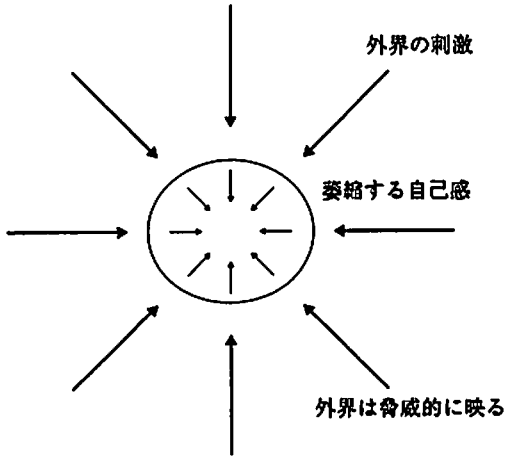

図9　安心感と知覚（安心感のない状態）[2)]

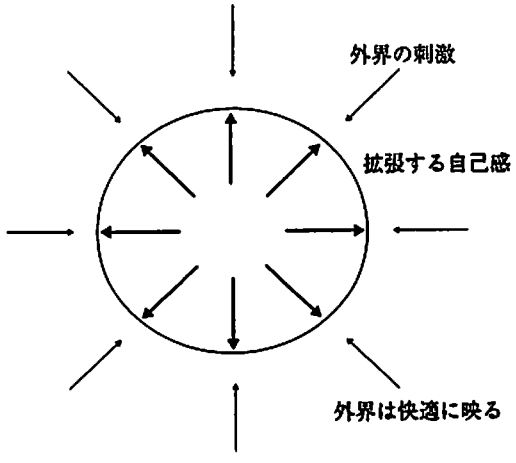

図10　安心感と知覚（安心感のある状態）

たとえば，「りんご」ひとつとってもおのおの色も形も大きさも実に様々であるにもかかわらず，われわれはそれらをみんな「りんご」として認識することができるが，彼らはそのような対象認識の枠組みをもたないことが多い．おのおのすべての色，形，大きさなどの差異に強く引きつけられていく．その差異は彼らにとっては好奇心を高め，吸い込まれるようにしてそれに着目するようになる．われわれにとっては単にひとつの風船でしかないかもしれないが，表面の柔らかさ，弾力性，色具合，口の中に入れた際の感触，表面の光沢とその微妙な変化など，どれひとつとっても彼らの心を揺り動かさずにはおれないのである．

このようにわれわれの認知する世界と，自閉症の子どもが捉える世界がいかに異なった様相を呈しているか，彼らの心を動かすのはどのようなものか，彼らの視点に立って感じ取ることが大切になるのである．

5. 子どもの対象世界を映し返すこと

われわれはいつの間にか暗黙のうちに，対象世界をことば文化によって，ある枠組みでもって捉える術を身につけている．これこそ認識といわれる心の営みであるが，彼らにわれわれと同じようなことば文化を身につけるための援助を心がけることは，彼らへの関係発達支援において重要なことはいうまでもない．

そのためには，子どもの対象への関心の持ち方，着目の仕方をわれわれが分かち合うことと，そこでわれわれがその場にふさわしいことばを語りかけることが大切なのである．それが彼らの心の世界をわれわれのことば文化の世界で映し出すという営み(ミラーリング)となる．自分の周りに存在する対象(あるいは事象)が彼らにとって何を意味するか，そのことは客観的に一義的に決められているのではない．その意味を規定しているのは，子どもがその対象のどこにどのように着目しているか，どのような状況にあるのか，などといった文脈にある．「いま，ここで」の対象のもつ意味はその文脈に規定されているのだ．よって，われわれが彼らに語りかけることばは，その文脈にふさわしいものでなくてはならないのである．

6. 快の情動興奮を分かち合い，高め，持続するように支援すること

不快な情動がフラッシュバックの引き金になるように，快の情動興奮も快適な体験の想起に重要な役割を担っている．楽しい体験とそこで知覚した多様な刺激，とりわけわれわれが彼らに語りかけたことばは，彼らに深く記憶されていく．

人間同士の気持ちが響き合うようになるためには，快の情動の興奮が持続し，容易に再現するということが不可欠である．しかし，自閉症の子どもの気持ちが変化する様子を見ていると，情動興奮の流れは断片的で連続性に乏しいことが分かる．たとえ彼らが一時的には楽しんでいるように見えても，その情動興奮は持続せず，まるで何ごともなかったかのように，突然その興奮は冷めてしまう．フラッシュバックに端的に表されるように，些細な刺激で，不快な情動興奮が突然起こってくる．このようにして，今目の前で開かれている関係の中で体験している世界が子どもの中で切り裂かれ，彼らには世界が断片化したものとして体験されていくことになるのである．

このように他者との間で情動が共有された状態がなかなか持続しがたいのはなぜか，その原因が明らかとなり，それに対するなんらかの援助が考えられていけば，自閉症児への関係支援は大きく飛躍するのではないかと筆者はひそかに考えている．

おわりに

以上，自閉症の治療(支援)について，われわれの依って立つ関係発達臨床の立場から論じて

きたが，われわれは自閉症の人々の援助を行う際に，常に彼らの気持ち(情動)のあり方を念頭において考えている．われわれは自閉症の基本的問題として情動を最も重視しているが，情動が充分に機能するためには非常に根気強い働きかけが必要であることを日々の臨床で痛感している．しかし，このような立場からの支援によって初めて自閉症の子どもたちも主体性をもった存在として生きていく力をもちうるのではないかと思う．

文 献

1) 小林隆児．自閉症の発達精神病理と治療．東京：岩崎学術出版社．1999.
2) 小林隆児．自閉症の関係障害臨床．京都：ミネルヴァ書房．2000.
3) 小林隆児．自閉症と行動障害．東京：岩崎学術出版社．2001.
4) 小林隆児．自閉症とことばの成り立ち．京都：ミネルヴァ書房．2004.
5) Richer J. An ethological approach to autism：From evolutionary perspectives to treatment. In：(eds.), Richer, J. &Coates, S. Autism：The search for coherence. London：Jessica Kingsley, pp. 22-35. 2001.
6) Werner, H.Comparative Psychology of Mental Development. NewYork：International University Press. 1948. 鯨岡 峻・浜田寿美男訳．発達心理学入門．京都：ミネルヴァ書房．1976.